

## 多聞院日記に現われる消化器疾患 の検討

中 村 昭

多聞院日記は室町時代末期から安土桃山時代にかけて奈良興福寺の子院の多聞院において書かれた日記である。ここではいわゆる寺院内製薬も行われていて、疾病や薬に対する関心が高く、日記には種々の病名が現われている。当時の医書からは知り得ない医療の実態を覗うことができるという意味で価値があると思われる。今回は消化器疾患の範囲の病名を拾い出して少しく検討を加えて発表する。

便宜上歯科疾患もここに含めると、虫食歯、齒煩、齒ウヅク、齒痛というような言葉がある。次に漢方医学による病症名では、霍乱、膈、脾胃の煩、積聚、吐血、大痢、痢結、痔がある。また和名による病症名として、腹痛、腹下し、腹煩、腹氣、腹中煩、ムセ病、シャクリがある。

先ず歯であるが、虫食歯は現代の虫歯と同じであり「宝

藏院虫食歯ノ薬妙薬存知……」と用いられている。齲歯と  
いうのは古い概念であり、平安時代の知名類聚抄にも齲歯  
にムシカメハと訓をつけ「虫クラフノ齒缺ケ朽チル也」と  
説明している。

齒煩では「やど齒煩ウ間、俄ニ薬取寄セ調合シ遣ワス、  
人參一兩八十文ツツ也、一段高直ノ事也」という文があ  
り、齒の薬を調合して投薬した事、その原料の人參が値上  
りしていることなどが書かれていて興味深い。しかし「本  
坊云ウ、齒ノ痛ニハ毎朝念仏十遍申シテ……」などと念仏  
に頼ることもあった。

この日記に現われる漢名及び和名の消化器の病症名を初  
めに列挙したが、このうち正規の病名として最も多く現わ  
れるのは霍乱であり、膈、脾胃の煩、積聚などは各一回現  
われるに過ぎない。当時の漢方の知識で腹部疾患を鑑別診  
断するのは困難な事だったのであろう。大体は腹煩とか腹下  
しとかいう症状名によって投薬していたようである。

霍乱は和名抄にはシリヨリクチヨリコクヤマヒと記され  
ており、急性胃腸炎という事はわかるがそれ以上は確定で  
きない。「夕べ夜ニ入り以テノ外熱氣指シ一夜煩ウ、腹下

シ霍乱煩ウ」「然ル処、大政所俄ニ霍乱大事ニ煩イ出シ」  
などと用いられている。また「暁ヨリ目舞、霍乱心カ、香  
薷散吞テヨシ」とか「北庵法印見廻リ、則チ脉取ル処霍乱  
ノ心ニハ非ズ、中風心ト覚エタリ」などという記載があ  
り、霍乱は精神神経症状を前兆とすると思われていたらし  
く、中風との鑑別を問題にしている事は注意を惹く所であ  
る。なお、ここに出ている北庵法印は脈診をする僧医であ  
るが、この日記の記録者の多聞院英俊は調剤はするが脈は  
取らず、その為に法印の診断を仰いだのである。

また「過夜、霍乱煩イ以テノ外ナリシ、腹下シ氣上リ大  
汗ヲカク間、アカダ五粒ノム」という記録もある。腹煩の  
薬としては香薷散と阿伽陀圓がよく用いられている。香薷  
散は和剤局方収載の方剤であるが、阿伽陀圓は仏教医学に  
おいて伝承された方剤である。「長善房腹煩、アカダニテ  
減也、深円房又腹煩、アカダ与エタリ」などとよく用いら  
れている。

一つの処方では病状が改善しなければ種々の薬を試みてい  
る。「長得房俄ニ腹痛、沈思々々、法印ノ薬ニテやう／＼  
オチ入ル」「又暁ヨリ腹痛ム間、法印ニ申シ入レ脉取り薬

給ウ、イカニモオチ入ラズ」「長得房、終ニ減無シ如何、咲  
止々々、專堯房ノ薬ニテオチ入レリ」オチ入ルとは落ち着  
くということであり、減とは効験ということである。腹痛  
は和名で腹痛はらいたと発音されたであろうが、病源候論には腹痛  
候という項目があり「腹痛は腑臟虚して寒冷の氣腸胃募原  
の間に客り、結聚して散ぜず正氣邪氣と交争し、相撃つ故  
に痛むに由る」と書かれている。

膈と脾胃の煩については次のような文がこの日記にあ  
る。「兎角ニ膈ヲ煩イ、脾胃ノ煩ニハ禾嘉散ニ過タルハコ  
レ無キ故、十斤吞ミテ本復セリ、不食モ脾胃ノ煩間……」  
脾胃の煩というのはある程度の漢方医学の知識を背景とし  
ている言葉である。やはり病源候論には脾胃病諸候とい  
うのがあり、「脾は臟なり、胃は腑なり、脾胃ニ氣相ニ表裏  
となる、胃殻を受け、脾これを磨す」などと書かれてい  
る。著者の英俊は医書や本草書をある程度読んでいたこと  
は日記にも出ている。

膈というのは消化管の閉塞のような病態を表わしている  
が、和名のムセ病やみというのと同様な病症と思われる。「如  
今ハ必死ナリ、不便（不憫）々々、ムセ病ナリ」などと記

録されている。流布本大同類聚方にもムセ病という病名が見えている。また、和名抄は哽咽にムスと訓をつけ「食塞ガル也」と説明している。

大痢、痢結という言葉は痢を便という意味に用いており、大痢は大便、痢結は便秘のことである。

(七沢リハビリテーション病院)

## 新確認の慶長古活字版『黄帝秘要 良方』

○白石尚基

原中瑠璃子・小曾戸洋

活字印刷は宋代に中国で発明され、西漸してグーテンベルグの活字へとつながったことは普く知られるが、当の中国では定着するに至らなかった。しかしそれはまた東漸して朝鮮に定着した。朝鮮古版には活字本がすこぶる多い。文祿慶長の役で、秀吉の武將らはかの地の活字印刷機具を戦利品とし、職人までもつれ帰ったから、たちまちわが国では活字印刷が盛行した。慶長年間に出版されたこれらの活字本は慶長古活字本と称され、出版文化史上極めて珍重される。

川瀬一馬氏(『古活字版の研究』)は活字開版の初期における医師の活動は目覚ましいものであったと指摘する。医学書は実用書である。古活字版中に占める医書の割合は高く、